

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02825

研究課題名（和文）古英語韻文の不変化詞の相関用法：時を表す不変化詞を中心として

研究課題名（英文）Correlatives in Old English Poetry

研究代表者

石黒 太郎 (Ishiguro, Taro)

明治大学・商学部・専任教授

研究者番号：60296548

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、古英語の韻文において同じ不変化詞が2つの節の冒頭に現われて、関連し、節と節を統語的に結びつける用法を、主要な韻文作品を調査して、現代英語の文の構造とは異なる、古英語韻文の文の構造の用例を収集し、分析した。調査の過程で、統語的に繋がりのある2つの節の間に入り込む節、すなわち挿入語句の重要性が明らかとなり、古英語韻文における挿入語句が統語に及ぼす影響を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究で、挿入語句として、特別な句読法（例えばダッシュ、括弧）で目立つようにこれまでの校訂テキストで示されてきた多くの節は、実は現代英語の「文」の概念に縛られてテキスト校訂を行ったことによって生まれたものであり、節と節とが緩やかにつながる古英語の韻文作品における統語法の中では特別な存在でなかったことを、この研究で示すことができた。

研究成果の概要（英文）：Correlative particles usually appear as two identical words that appear at the beginning of a clause and syntactically connect the two clauses. I started out this project by collecting examples from Old English poems that contain such correlative particles. During the course of the research, I realized the significance of parentheses, independent clauses or strings of words that appear between two syntactically connected clauses, in studying the syntactic structure within a sentence characteristic of Old English verse. The fruits of this research project shed light on parentheses in Old English poetry.

研究分野：中世英語学

キーワード：古英語 相関構文

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古英語の不変化詞である従属接続詞には副詞と同じ綴りのものが多く、それが節の最初にあると接続詞であるのか副詞であるのか判別が容易ではない。そのようなものの中で時を表す不変化詞としては þa “when/ then”、þonne “when/then”、nu “now”がその代表的なものである。そしてその不変化詞はしばしば þa . . . þa . . . と組になって節と節をつなぎ複文もしくは重文を作る。Mitchell (1985)はそのような副詞・接続詞の判別の難しい構文について比較的詳しく考察し、Andrew (1948)などの先行研究の誤謬を指摘するものの、独自の明確な判別方法を提示しようとはしていない。その点で曖昧な不変化詞を取り上げ、韻律と語順からこの曖昧さを断ち切ろうと大胆な提案をしたのは Blockley (2001)である。だが Blockley は基本的に Beowulf 一作品を調査して議論しているだけであり、相関用法は議論されていない。つまり作品ごとの文体の違いを考慮に入れた、韻文作品を対象とした相関用法の研究はなされていない。またこれまでの研究はみな隣接した2つの節の関係ばかりを考察対象としているが、韻文の相関用法は隣接する2つの節にとどまらない。1つ以上の節をまたいで相関する事例の研究はない。

石黒 (2010)で、古英語散文作品において nu “now”が nu . . . nu . . . と組になって節と節をつないで複文もしくは重文を作る相関用法についてラテン語との比較をしながら考察を開始し、Ælfric が説教集の中でこの相関語を効果的に使っていることを Ishiguro (2012)で示した。2015年からは、相関語としての nu について古英語韻文作品についてもすでに調査を始め、主要な韻文作品である Andreas に見られるこの現象について日本英語学会第34回大会で個人研究発表(2016年11月)の中で論じた。これらの研究を通して韻文作品において節と節を結ぶ相関語 nu が韻文の統語構造を考える上で重要なものであることに着目した。また隣り合う節ばかりではなく、その間に他の独立した単文をはさんで、現代語では1文の中に収まらない2つの節の間にも相関関係があることをこれまでの研究で発見している。

そこで本研究では古英語韻文の主要作品で、不変化詞の相関用法がどのように用いられているかを解明することで、古英語韻文テキストの校訂と、韻文における文構造の統語的研究に応用するための基盤研究としたいと考えた。

引用文献

Andrew, S. O. (1948) *Postscript on Beowulf*. Cambridge. / Blockley, M. (2001) *Aspects of Old English Poetic Syntax: Where Clauses Begin*. Urbana and Chicago. / 石黒太郎 (2010) 「古英語の相関語 nu について」『明治大学教養論集』457 / Ishiguro, T. (2012) "Correlative nu Constructions in Ælfric's Catholic Homilies." *The Journal of Humanities* 18: 1-10 / Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*. Oxford.

2. 研究の目的

古英語韻文における þa、þonne、nu などの相関用法を明らかにするという目的を達成するために、本研究では3年をかけて基礎的研究である、古英語韻文テキストに見られる不変化詞の相関用法の位置づけを行い、それを踏まえた応用的研究である古英語韻文の主要作品を網羅的に調査して用例を収集し、統語的、語彙的、文体的な面から分析を進め、その上で最終的な成果を発表することを主要な課題とした。

本研究課題の最終的な目的として、文構造の判断に新たな指針を提示することで、古英語韻文テキストの校訂の発展に具体的に寄与すること、さらには、従来の「文」の中にとどまる統語論の枠を超えた、新たな統語的研究の新分野を切り拓くことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では3年間で(1)(2)について同時に研究を行った。

(1) 古英語韻文テキストに見られる不変化詞の相関用法の位置づけを行う基礎的研究。

(2) 古英語韻文の主要作品を網羅的に調査して用例を収集し、統語的、語彙的、文体的な面から分析を行う応用的研究。

(1) はフィロロジーだけでなく、理論言語学的な先行研究も視野に入れて韻律、韻文文法、写本校訂の動向を調査し、中英語の韻文テキストの相関用法を概観した。(2) については、作品ごとに異なる用例の傾向のあることが予想されたため、用例の文脈、テキスト成立の背景などを踏まえながら、用例の分析を進めた。(1) については、関係する文献調査を3年間にわたって継続的に行い、(2) については各年度に次のように対象を分けて用例の収集と分析を行った。

古英語の韻文作品を現代に伝える主要な4写本(Junius、Vercelli、Exeter、Beowulf 写本)を研究対象とし、2017年度の研究では Junius 写本に収められている作品を対象に接続詞 nu の相関構文の分析から始め、古英語の韻文作品でもっとも校訂本の多い Beowulf を調査した。2018年度は残りの Vercelli 写本と Exeter 写本の調査を行うと同時に、挿入語句の研究をさらに進め、国際学会、研究誌での論文発表を行った。最終年度となる2019年度には分析結果をまとめ、国際学会での学会発表、研究誌での論文発表という形で成果を発表した。

4. 研究成果

(1) 2017年度の研究では、当初の予定を若干変更し、Junius 写本に収められている Genesis B における接続詞 nu の相関構文の分析から始めた。この韻文作品は古サクソン語で制作された

韻文作品を古英語に翻案したものであり、現存する古サクソン語の作品断片と照合することで、古英語とならぶゲルマン語の相関構文との比較ができた点で意義のある研究であったと考えている。この研究成果は"The Clause-Initial nu in the Old English Genesis B"と題する論考にまとめて、『明治大学教養論集』第530号(2017)に発表した。

本年度の後半は古英語の韻文作品の中でもっとも校訂本の多い Beowulf を中心に研究を実施した。相関構文を研究する中で、parentheses 挿入語句と呼ばれる表現が、古英語の韻文作品の中で節と節を現代英語とは異なる方法で結びつける、ひとつの大きな特徴となっているという認識をますますもつようになった。挿入語句は、古英語の韻文作品の文体の特徴とされており、先行研究でもその存在を前提として議論がなされている。20世紀後半以降のすべての Beowulf 刊本において挿入語句が句読法によって示されているのだが、どの語句を挿入語句とするかについては校訂者の判断が大きく分かれている。統語的に関係のある節と節の間に入り込む挿入語句は、本研究課題の相関用法を研究する上で無視できない現象となっている。

また7月に開催されたリーズでの国際学会(IMC2017)においてロンドンの Jane Roberts 名誉教授をはじめ多くの中世研究者に会い、本研究課題について多くの助言を得ることができた。

(2) 2018年度の研究は、2017年度の後半に調査した Beowulf の parentheses 挿入語句と呼ばれる表現に関する論考をまとめ、その調査結果をもとにほかの韻文作品に見られる挿入語句の調査と分析を行うことが中心となった。挿入語句は、節と節とを現代英語とは異なる方法で結びつける、古英語韻文作品の文体的特徴のひとつとされている。20世紀の後半以降に刊行された Beowulf の刊本をすべて調査した成果は、2018年7月に英国 Leeds で開催された国際学会(International Medieval Congress 2018)において "Parentheses in Beowulf" と題して研究発表を行い、その研究発表をもとに内容を拡充した論考を "Parentheses in Beowulf: Editors' Choices" と題して『明治大学教養論集』第537号(2019)に発表した。7月の国際学会では、本研究課題と関連のある不変化詞の研究を続けるフランスの研究者をはじめ、新進気鋭の研究者と議論をする機会を得た。

2018年度は Beowulf のほか、Vercelli 写本、Exeter 写本に収められた韻文作品の調査も始めた。Vercelli 写本の作品の中でも Andreas は刊本が比較的多く、Beowulf と比較することで新しい発見があった。

(3) 2019年度にはまず7月にポーランドで開催された International Association of University Professors of English の Medieval Symposium において、古英語の韻文作品に見られる挿入語句の用例と従来の校訂本における挿入語句の扱いについて報告した。このシンポジウムでの議論の中で受けた有益な指摘や、その後の補足的な自身の研究成果を加えて、2020年6月刊行予定の研究論文にまとめた。

挿入語句として、特別な句読法(例えばダッシュ、括弧)で目立つようにこれまでの校訂テキストで示されてきた多くの節は、実は現代英語の「文」の概念に縛られてテキスト校訂を行ったことによって生まれたものであり、節と節とが緩やかにつながる古英語の統語法の中では特別な存在でなかったことを、この研究で示すことができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Taro Ishiguro	4. 巻 93
2. 論文標題 Parentheses in Old English Poems	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Poetica	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taro Ishiguro	4. 巻 544
2. 論文標題 Accents in Cambridge, Corpus Christi College, MS 389	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 285-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石黒太郎	4. 巻 533
2. 論文標題 seednessの語形成について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Taro Ishiguro	4. 巻 537
2. 論文標題 Parentheses in Beowulf: Editors' Choices	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Taro Ishiguro	4. 巻 25
2. 論文標題 Two Features of the Translation Style of the Old English Bede	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Humanities	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Taro Ishiguro	4. 巻 33
2. 論文標題 Review of The Old English History of the World, by Malcolm R. Godden	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Studies in Medieval English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taro Ishiguro	4. 巻 530
2. 論文標題 The Clause-Initial nu in the Old English Genesis B	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 127-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Taro Ishiguro
2. 発表標題 Parentheses in Beowulf
3. 学会等名 International Medieval Congress 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Taro Ishiguro
2. 発表標題 The Grammatical Subject in Parentheses in Old English Poems
3. 学会等名 International Association of University Professors of English (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Taro Ishiguro
2. 発表標題 The 'Coming to the Throne' Phrases in the Orosius, the Bede, and the Anglo-Saxon Chronicle
3. 学会等名 International Congress on Medieval Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考